

「abstract speaking – sharing uncertainty and collective acts」のためのステートメント 蔵屋美香＋田中功起

かつてない規模の東北大震災を経験した日本は、世界に向けてどのようなメッセージあるいは問いを発するべきでしょうか。第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展において、日本館は、いかなる形の表現を取るのであれ、なにかしらの方法論によって、それが具体的なアプローチをとるにせよ、抽象的な思考をうながすものであるにせよ、震災以後の日本の状況を反映したものが展開されるべきだと思っています。

今回のプランでは、展覧会以前から継続して行われている複数のプロジェクトたち、「不安定なタスク」と呼ばれる集団行為、特殊な状況下での人びとの共同作業のプロセス映像、それらの記録の集積としての展覧会、プロセスに言及するテキストとカタログ、そうした構成要素すべてを同列に扱い、「他者の経験を自分のものとして引き受けることはいかにして可能か」あるいは「出来事の経験はいかにして共有もしくは分有されるのか」というテーマに取り組みます。

アーティストである田中もキュレーターである蔵屋も、停電や放射線被害など、間接的なかたちで震災を経験しています。一方、近親者や家財を失った人びとや、原発事故により生活圏から離れざるを得なかった人びとの直接的な経験がそこには対峙され、ぼくらは当事者と傍観者の間で引き裂かれているように感じています。しかし、日本国外からすれば日本人すべてが被災者として理解され、東京と福島の間隔関係さえも定かではない人びとも多くいます。そうした中で、それぞれの経験に差を付けることに意味があるのでしょうか。ぼくたちは、それぞれの個人として、この世界をばらばらの仕方で享受し、解釈し、理解しようとしています。

さまざまな大小、濃淡で大きな出来事を経験した人びと、あるいはその出来事から遠く離れた国や地域に住む人びと、または時間を隔てた後代の人びと、ぼくらはそうした空間的、時間的な距離の中に無数に配置された点です。いままでプロジェクトが行われたそれぞれの場所とこの展覧会、そして今後さらに継続されるプロジェクトたちは、いわば無数の点であるぼくたちが交差し、滞留する受け皿として設計されています。

さまざまな階層へと複数化された経験、そうした共有しえない経験の層を束ねることで、なんとか物事／出来事／世界を理解するための可能性を探ることはできないでしょうか。具体的な事象を少し抽象的に語り直すことで、物事への理解を助けることはできないでしょうか。

出来事への理解と経験共有のためのささやかなプラットフォーム、一時的な展覧会という契機を越えて、それらは構想され、作られたものです。